

逗子の風土に生まれた「^{ことば}言の^{あや}綾」の幻——泉鏡花の幻想文学について

概要

序 泉鏡花との出会い

- (1) 近代日本文学史の中の鏡花
- (2) 鏡花の逗子時代
- (3) 『春昼・春昼後刻』の魅力と特殊性
- (4) 逗子的幻想文学の^み水脈^を
- (5) 世界文学の中の鏡花

(2) 鏡花の逗子時代

1902年夏（一回目の滞在）

1905年夏～1909年2月（二回目の滞在）

「逗子もの」の主な作品（吉田昌志『泉鏡花 “美と永遠”の探求者』119頁より）

『^{きしやうもん}起誓文』（1902年11月）

『^{まい}舞の^{そで}袖』（1903年4月）

『^{こちやうのきよく}胡蝶之曲』（1905年10月）

『^{あくじゆうへん}悪獣篇』（1905年12月）

『^{つきよゆうじよ}月夜遊女』（1906年1月）

『^{しゅんちゆう}春昼』（1906年11月）

『^{しゅんちゆうごこく}春昼後刻』（1906年12月）

『^{くさめいきゆう}草迷宮』（1908年1月）

『^{ほおしろ}頬白』（1908年4月）

『^{ぬまふじん}沼夫人』（1908年6月）

『^{あまがべに}尼ヶ紅』（1909年2、4月）

『^{うみ}海の^{ししや}使者』（1909年7月）

『^{いろごよみ}色暦』（1910年10月）

『^{つま}爪びき』（1911年12月）

『桜貝』 (1915年1月)

『女波』 (1915年9月)

『二三羽——十二三羽』 (1924年4月)

上記作品の一部は文庫本などで読むことができます：

『絵草紙 月夜遊女』山村浩二 絵／アダム・カバット 校註 (平凡社)

『春昼・春昼後刻』 (岩波文庫)

『草迷宮』 (岩波文庫)

『文豪怪談傑作選 泉鏡花集 黒壁』東雅夫編 (筑摩書房)：『尼ヶ紅』を収録

『鏡花短篇集』川村二郎編 (岩波文庫)：『二三羽——十二三羽』を収録

(3) 『春昼・春昼後刻』の魅力と特殊性

引用1)

「お爺さん、お爺さん。」

「はあ、私けえ。」

と一言で直ぐ応じたのも、四辺が静かで他には誰も居なかつた所為であらう。然うでないと、其の皺だらけな額に、顛巻を緩くしたのに、ほか／＼と春の日はさして、とろりと酔つたやうな顔色で、長閑かに鋤を使ふ様子が——あの又其の下の柔な土に、しつとりと汗ばみさうな、散りこぼれたら紅の夕陽の中に、ひら／＼と入って行きさうな——暖い桃の花を、燃え立つばかり揺ぶつて頬に嘔つて居る鳥の音こそ、何か話をするやうに聞かうけれども、人の声を耳にして、それが自分を呼ぶのだとは、急に心着きさうもない、恍惚とした形であつた。(「春昼」65頁)

引用2)

最も一方は、そんな風に——よし、村のものゝ目からは青鬼赤鬼でも——蝶の飛ぶのも短艇の帆かと思ゆるばかり、海水浴に開けて居るが、右の方は、昔ながらの山の形、真黒に、大鷲の翼打襲ねたる趣して、左右から苗代田に取詰むる山の棲、一重は一重毎に迫つて次第に狭く、奥の方暗く行詰つたあたり、打つけなりの茅屋の窓は、山が開いた眼に似て、恰も大なる蟄の、明け行く海から搔窺むで、谷間に潜む風情である。(「春昼」69頁)

引用3)

うつとりするまで、眼前真黄色な中に機織の姿の美しく宿つた時、若い婦女の衝と投げた梭の尖からひらりと燃えて、いま一人の足下を閃いて、輪になつて一ツはねた、朱に金色を帯びた一条の線があつて、赫燿として眼を射て、流のふちなる草に飛んだが、火の消ゆるが如くやがて失せた。

赤棟蛇が、菜種の中を輝いて通つたのである。

悚然として、向直ると、突当りが、樹の枝から葉へ搦んだやうな石段で、上に、茅ぶきの堂の屋根が、目近な一朵の雲かと見える。棟に咲いた紫羅傘の花の紫も手に取るばかり、峯のみどりの黒髪にさしかざられた装の、其が久能谷の観音堂。(「春昼」70-71頁)

引用4)

段を上ると、階子が揺れはしまいかと危むばかり、角が欠け、石が抜け、土が崩れ、足許も定まらず、よろけながら攀ぢ上つた、見る／＼、目の下の田畠が小さくなり遠くなるに従ふて、波の色が蒼う、ひた／＼と足許に近づくのは、海を抱いた恁る山の、何処も同じ習である。

樹立ちに薄暗い石段の、石よりも堆い青苔の中に、あの螢袋といふ、薄紫の差俯向いた桔梗科の花の早咲を見るにつけても、何となく湿つぽい気がして、然も湯瀧のあとを踏むやうに熱く汗ばんだのが、颯と一風、ひや／＼となつた、境内は然まで広くない。

最も、御堂のうしろから、左右の廻廊へ、山の幕を引廻はして、雑木の枝も墨染に、其処とも分かず松風の声。渚は浪の雪を敷いて、砂に結び、巖に消える、其の都度音も聞こえさう、但残惜いまでびたりと留むだは、きりはたり機の音。

此処よりして見てあれば、織姫の二人の姿、菜種の花の中ならず、蒼海原に描かれて、浪に泛ばらむ風情ぞかし。(「春昼」72-73頁)

引用5)

「まあ、何よりもお楽に、」

と袈裟をはずして釘にかけた、障子に緋桃の影法師、今物語の朱にも似て、破目を暖く燃ゆる状、法衣をなぶる風情である。(「春昼」93頁)

引用6)

不細工ながら、窓のやうに、箱のやうに、黒い横穴が小さく一ツづゝ三十五と
一側並べに仕切つてあつて、其の中に、づらりと婦人が並んで居ました。

座つたのもあり、立つたのもあり、片膝立てたしだらくな姿もある、緋の長襦袢
ばかりのもある。頬のあたりに血のたれて居るのもある。縛られて居るのもある、
一目見たがそれだけで、遠くの方は、小さくなつて、幽になつて、唯顔ばかり谷間
に白百合の咲いたやう。

悚然として、遁げもならない処へ、またコンコンと拍子木が鳴る。（「春昼」
119頁）

引用7)

「見物が他にも居たかとも思ふ、と然うではない。其の影が、よろ／＼と舞台へ
出て、御新姐と背中合はせにぴつたり座つた処で、此方を向いたでございませう、
顔を見ると自分です。」

「えゝ！」

「それが客人御自分なのであります。

で、私へお話に、

（真個なら、其処で死ななければならんのでした、）

と言つて歎息して、真蒼になりましたつけ。

どうするか、見て居たかつたさうです。勿論、肉は躍り、血は湧いてな。

しばらくすると、其の自分が、稍身軀を捻ぢ向けて、惚々と御新姐の後姿を
見入つたさうで。指の尖で、薄色の寝衣の上へ、恁う、山形に引いて下へ一ツ△を
書いたでございませうな、三角を。」（「春昼」120頁）

引用8)

「夢と言へば、これ、自分も何だか夢を見て居るやうだ。やがて目が覚めて、
あゝ、転寐だつたと思へば夢だが、此まゝ覚めなければ夢ではなからう。何時か聞
いた事がある、狂人と真人間は、唯時間の長短だけのもので。風が立つと時々波
が荒れるやうに、誰でも一寸一寸は狂気だけれど、直ぐ、凧ぎになつて、のたりの
たりかなで澄む。もしそれが静まらないと、浮世の波に乗つかつてる我々、ふら／

＼と脳が揺れる、木静まらんと欲すれども風止まずと来た日にや、船に酔ふ、其の
浮世の波に浮んだ船に酔ふのが、立処に狂人なんだと。

危険々々。

ト来た日にや夢も又同一だらう。目が覚めるから、夢だけれど、いつまでも覚め
なけりや、夢ぢやあるまい。

夢になら恋人に逢へると極れば、こりや一層夢にして了つて、世間で、誰某は？
と尋ねた時、はい、とか何んとか言つて、蝶々二つで、ひら／＼なんぞは悟つたも
のだ。

庵室の客人なんざ、今聞いたやうだと、夢てふものを頼み切りにしたのかな。」
と考へが道草の蝶に誘はれて、ふわ／＼と玉の緒が菜の花ぞひに伸びた処を、風
もないのに颯とばかり、横合から雪の腕、緋の襟で、つと爪尖を反らして足を踏伸
ばした姿が、真黒な馬に乗つて、蒼空を翻然と飛び、帽子の廂を掠めるばかり、
大波に乗つて、一跨ぎに紅の虹を躍り越えたものがある。（「春昼後刻」126
頁）

引用9)

「其処は貴下、お察し遊ばして下さる処ぢやありませんか。
言の綾もございますわ。朝顔の葉を御覧なさいまし、表はあんなに薄つぺらな
もんですが、裏はふつくりして居りますもの……裏を聞いて下さいよ。」（「春昼
後刻」138頁）

引用10)

手帳の枚頁は、此の人の手に恰も蝶の翼を重ねたやうであつたが、鉛筆で描いた
のは……。

一目見て散策子は蒼くなつた。

大小農薄乱雑に、半ばかきさしたのもあり、曲んだのもあり、震へたのもあり、
やめたのもあるが、○と□と△ばかり。（「春昼後刻」151頁）

引用11)

「此の円いのが海、此の三角が山、此の四角いのが田畝だと思へば、それでもよ
うござんす。それから○い顔にして、□い胴にして△に坐つて居る、今戸焼の

姉様だと思へばそれでも可うございます、袴を穿いた殿様だと思へばそれでも可いでしやう。

それから……水中に物あり、筆者に問へば知らずと答ふと、高慢な顔色をしても可いんですし、名を知らない死だ人の戒名だと思つて拜んでも可んですよ。」

やう／＼声が出て、

「戒名、」

と口が利ける。

「何、何と云うんです。」

「四角院円々三角居士と、」（「春昼後刻」152頁）

引用12)

然らば、といつて、土手の下で、分れ際に、やゝ遠ざかつて、見返つた時——其紫の深張を帯のあたりで横にして、少し打傾いて、黒髪の頭おもげに見送つて居た姿を忘れぬ。どんなに潮に乱れたらう。渚の砂は、崩しても、積る、くぼめば、たまる、音もせぬ。たゞ美しい骨が出る。貝の色は、日の紅、渚の雪、浪の緑。（「春昼後刻」163頁）

(4) 逗子的幻想文学の水脈

橘外男（1894年～1959年）

- ・石川県金沢市に生まれる
- ・第7回直木賞を受賞（1938年）
- ・『逗子物語』という、逗子の寺院を舞台にした幽霊小説を発表（1937年）

(5) 世界文学の中の鏡花

引用13)

例へば人の行くにしましても、善と悪とは、晝と夜のやうなものです。その善と悪との間には、又滅すべからず、消すべからざる、一種微妙な所があります。善から悪に移る刹那、悪から善に入る刹那、人間はその間に一種微妙な形象、心状を現じます。私は、重にさう云ふたそがれの的な世界を主に描きたい、寫したいと思つて居ります。善悪正邪快不快のいづれの極端でもない、一種中間の世界、一種中間の

味ひを、私は作の上に傳へたいとも思つて居ります。（「たそがれの味」683-684頁）

引用14)

アーカムの西は丘陵が荒あらしくそびえ、斧に切りこまれたことのない、深い林の広がる谷がいくつもある。暗く狭い溪谷があり、そこでは木々が異様にかたむいて、日差にふれたことのない小川がさらさらと流れている。なだらかな斜面には岩の多い古さびた農場があつて、苔^{こけ}に覆われる低くがっしりした農家が、古いニューイングランドの秘密を永久^{とこしえ}に考えこみながら、大きな岩棚の陰に建っているとはいえ、いまではすべてが住む者もなく、太い煙突は崩れ、低い腰折れ屋根の下では屋根板が危険なほどたわんでいる。（H・P・ラヴクラフト「宇宙からの色」冒頭より）

参考文献

泉鏡花「たそがれの味」『鏡花全集』第28巻（岩波書店、1942年）

泉鏡太郎「春昼」『新編 泉鏡花集』第5巻（岩波書店、2004年）

泉鏡太郎「春昼後刻」『新編 泉鏡花集』第5巻（岩波書店、2004年）

吉田昌志『泉鏡花 “美と永遠”の探求者』（日本放送出版協会、1998年）

H・P・ラヴクラフト「宇宙からの色」『ラヴクラフト全集4』大瀧啓裕訳（東京創元社、1985年）